

18. 各領域の活動

<がん看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

看護相談室の事業の一環として、地域の看護者とがん看護学領域の大学院生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護勘後実践を検討する会」を開催している。令和2年度は、「今後の治療や療養につなげる症状マネジメント」をテーマに、第1回「がん患者の身体症状のマネジメントに困難を感じた事例」、第2回「がん患者の精神症状やスピリチュアルな苦痛症状のマネジメントに困難を感じた事例」をサブテーマに開催を企画していた。しかし、本年度は、COVID-19の影響により対面・集合による事例検討が難しく、開催ができなかったため、次年度の開催に向けて準備を行った。令和3年度は同じテーマで、コロナ禍においても地域の看護職の皆様が安心して参加できるように遠隔での開催についても検討し、実施していく必要がある。

2) 卒業生との交流会およびリカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラル』を発足し、活動を行っている。アストラルは、①学習会の開催、②メンターシップ、③メーリングリスト等による情報共有、④学会参加、⑤研究、⑥ホームページ・アストラルのブログ作成という7つの活動を通じて、アストラルの繋がりの強化と発展を目指している。令和2年度は、コロナ禍の中でもアストラル学習会を開催できるように検討し、Zoom ミーティングを活用して遠隔での開催に取り組んだ。

【第1回】事例検討会

日時：2020年12月12日（土）14:00～15:30

場所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 C326・Zoom ミーティング

参加者：13名（修了生11名、教員2名）

テーマ・事例提供：

「終末期がん患者の家族支援に戸惑いを感じた同僚看護師との関わり」
社会医療法人仁生会 細木病院 藤田 歩 氏

【第2回】事例検討会

日時：2021年3月20日（土）13:00～14:30

場所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟 C326・Zoom ミーティング

参加者：12名（修了生9名、大学院生2名、教員2名）

テーマ・事例提供：

「妊娠35週でALLを発症したAYA世代患者の骨髄移植の意思決定に向けた関わり」

高知大学医学部附属病院 がん看護専門看護師 小松 美帆 氏

本年度は、遠隔で開催したことにより、県内外の修了生やがん看護専門看護師が参加することが可能となった。次年度もZoom ミーティングを活用した事例検討会の企画を検討し、全国の修了生の参加を募るとともに、遠隔で効果的な事例検討ができるように方法を工夫し、支援していく。

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域では、大学院生や修了生を対象とした特別講義を継続して開催している。特別講義では、修了生が後輩である大学院生や修了生に対して、修了後の役割開発のプロセスや日頃のOCNSとしての実践活動について語る機会を提供している。

今年度はCOVID-19の影響により講師を招くことができず、開催に至らなかった。次年度はWeb開催を検討し、学びを継続させていく予定である。

4) 高知県がん教育推進協議会における活動

がん対策推進基本計画に、がん教育・がんに関する知識の普及啓発が課題にあげられており、各都道府県でがん教育への取り組みが行われている。高知県では、高知県がん教育推進協議会において、がん教育の内容を充実させ、がんに関する正しい知識を理解し、がんを学ぶことを通して健康といのちの大切さに気づくことを目指し、様々な取り組みが行われており、本学の教員も参画している。令和2年度は、がん教育総合支援事業「本山町内学校保健委員会研修会」の講師および外部講師派遣事業の講師として県内の3つの高校において、4名の教員が高校生および職員を対象にがん教育を実施した。

① 本山町内学校保健委員会

日時：2020年7月28日（火）16:00～17:00

対象：小・中学校の管理職、養護教諭、保育所所長、本山町健康福祉保健師、教育長他
18名

講師：高知県立大学看護学部 藤田 佐和

内容：今、なぜ「がん教育なのか」-がん教育の必要性と効果的な健康教育の進め方-

② 高知県立高知北高等学校

日時：①2020年7月5日（日）16:10～17:00

②2020年7月8日（水）16:10～17:00

対象：①②通信制 50名

講師：①高知県立大学看護学部 田之頭 恵里

②高知県立大学看護学部 庄司 麻美

内容：がんの基礎知識、がんと生きる、がん検診の大切さに関する授業

③ 高知県立須崎総合高等学校

日時：2020年12月15日（火）14:30～16:00

対象：1年生 134名

講師：高知県立大学看護学部 森本 悦子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、がんと生きるに関する授業

④ 高知県立山田特別支援学校高等部

日時：2021年2月16日（火）11:30～12:15

対象：高等部 86名

講師：高知県立大学看護学部 有田 直子

内容：がんの基礎知識、がん検診の大切さ、たばこがんに関する授業

本年度初めて外部講師派遣事業に参画し、一定の教育効果や貢献はできたと考える。しかし、学校ごとの評価や振り返りが不十分であり、高知県や高校の担当教員と連携をとり、学校や学生の特性および課題に応じて講義内容や方法を工夫するなど、よりよりがん教育に向けて取り組む必要がある。

2. 研究活動

令和 2 年度は、2019 年度にがんプロフェッショナル養成基盤推進プランの一貫として開講したがん高度実践看護師コース I・II の教育効果について分析を行い、「『がん高度実践看護師コース AYA 世代がん患者のケアとキュア』における看護介入モデルの作成を取り入れた教育効果」としてまとめ、高知県立大学紀要看護学部編に投稿した。次年度は、領域で取り組んでいる科学研究費基盤 B の分析を進め、結果を公表できるように取り組む。

<慢性期看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業の実施

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に令和元年度より高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

(1) 第2期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化（5施設）

第2期モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、web会議システムを活用した血管病調整看護師の育成研修を6回実施した。また県に地域連絡会の開催を要請した。

(2) 第1期モデル基幹病院の活動支援（2施設）

第1期血管病調整看護師活動支援として、活動に有効なツールであるIM-CAGスケールの説明会と、実践状況と活動に関するフォローアップ訪問を実施し相談支援を行った。

(3) 活動手順書の洗練化

医療機関で糖尿病看護にあたる看護師がハイリスク患者に対して行う生活指導や関係機関との地域連携等を行うため、昨年度作成した活動手順書をさらに洗練化するために、学内ワーキングを開催した。

(4) 事例検討会及び合同事例検討会の開催

第2期モデル基幹病院5施設に対し、web会議システムにて事例検討会を開催した。後日、第1期・第2期モデル基幹病院7施設に対し、対面及び遠隔にて合同事例検討会を開催し、血管病調整看護師の患者への理解を深めるために、社会的決定要因を内包した事例報告と、第1期モデル基幹病院からの活動報告を行った。

(5) 事業報告会の開催

事業報告会は、COVID-19の感染拡大の可能性を受け、参加者や地域の皆様への健康と安全を考慮し、web開催とした。

2) 令和2年度リカレント教育の開催

慢性期看護領域では、2019年度から高知県からの受託事業である糖尿病保健指導連携体制構築事業の昨年度の活動を高知県内の医療職者に知っていただき、事業への参加、およびネットワークづくりを目的に活動報告会を開催した。

日 時：2020年9月19日（土）13：30～15：30

方 法：高知県立大学池キャンパスをホストにZoomを用いた開催

発表者および内容

①令和元年度糖尿病保健指導連携体制構築事業について

高知県立大学看護学部 教授 内田雅子

②血管病調整看護師の取り組み

高知県あき総合病院 病棟看護師長・血管病調整看護師 川竹実佳氏

佐川町立高北国民健康保険病院 病棟副看護長・血管病調整看護師 国澤忍氏

③質疑応答

参加者：34名（看護師31名、保健師3名）、教員4名

2施設から血管病重症化予防としての2019年度の活動だけでなく1年目から2年目へと発展した活動となっていることを紹介していただいた。質疑応答では、介入が必要な対象者が多いこと、限られた人材でどこまで支援できるのか、多くの該当者からどのように対象者を絞る

のか、多忙な業務の中で継続して活動できる仕組みづくり、地域の保健師の方々との連携の仕方など、報告者と参加者との間で活発な意見交換がなされた。

① 研究活動について

2017～2018年度に実施した高知県立大学学長助成事業・戦略的プロジェクト研究「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発—慢性疾患看護専門看護師による病院と地域の看看連携を中心に—」(study I、II、IIIで構成)の成果の一つである「高知県における生活習慣病重症化プロセスにおける社会的決定要因の影響」を報告した。

＜急性期看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質的向上を図ることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。今年度はテーマを「鎮める力」とし、1回のケア検討会を計画した。

今年度は COVID-19 感染状況を鑑み、テーマを「鎮める力」とし、1回のケア検討会のリモート開催を10月に予定したが、参加希望者はおらず、開催中止とした。

2) リカレント教育

①CCNS 申請への支援

今年度はリモートにて CCNS 認定審査に向けた学習会を5回開催し、のべ13名の参加者があった。個々に自身の課題を抽出し、それに対して取り組むことができ、今年度は2名の CCNS が誕生した。

3) 高知医療センターとの包括的連携事業

(1) 5B フロアのリーダー看護師のシミュレーション学習会支援

5B フロアでは、これまで新人看護師を対象としたシミュレーション学習支援を年2回、実施し、新人看護師の成長を実地指導者や病棟管理者とともに実感してきた。今年度はシミュレーション教育支援を新人看護師からリーダークラスの看護師へと拡大し、予期せぬ状況への対応としてアセスメント、報告ができることを目的とし、計画した。しかし、高知県内の COVID-19 感染拡大やフロアの状況より、今年度は計画、打合せのみとし、次年度の開催へと変更した。さらに今後は看護師自らが計画、運営できるように徐々に支援へと方法を変更していく予定である。

(2) 7B フロアのシミュレーションを活用した3～4年目看護師の育成

7B フロアでは、昨年度に引き続き、パートナーシップ・ナーシング・システムでチーフリーダーを担う時の、急変時の判断や行動、対応についてシミュレーション学習を実施した。チーフリーダーとして急変時にどのように対応するとよいか、活発な意見交換、学びの場となった。設定された状況について、落ち着いて考えることにより、参加者より様々な視点があげられ、思考する幅の広がりがうかがえた。会を進めるうちに参加者の発言回数も増え、チーフリーダーとしてどのように動くといいか、イメージすることができ、病棟管理者も含めて今後どのように急変時にリーダーとして役割を果たしていくといいかを考える機会となった。次年度も継続する予定である。

(3) ICU 異動看護師の成長を OJT で効果的に支援する

3A フロアでは他部署から異動してきた看護師の教育について以前から指導について様々な方法で取り組んできたが、部署より要望があり今年度より実地指導者への効果的な支援について、包括的連携事業として取り組んだ。OJT を用いて支援する方法を活用できる学習会を開催した。3名の参加者があった。今年度は1回の開催にとどまっているが、次年度も継続して学習会を開催する予定である。

2. 研究活動

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費等の助成を受け研究活動に取り組んでいる。平成28年度から4年間の計画で「家族の体験を基盤としたクリティカルケアにおける悲嘆ケアガイドラインの開発」（研究代表者：大川宣容）では、昨年度最終年度を迎えているが、さら

にデータ分析、集約をすすめ、「救急外来看護師が行う悲嘆ケアの実態調査～自由記述内容のテキストマイニングによる分析」（大川宣容, 井上正隆, 田中雅美, 森本紗磨美, 岡林志穂, 西塔依久美）として高知県立大学紀要 70 巻（2021 年 3 月発刊）へ投稿した。2020 年度から 3 年間の計画で「術前の心理的準備性向上による術後認知機能障害を防ぐケアモデルの開発」（研究代表者：井上正隆）、平成 30 年度から 3 年間の計画で「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」（研究代表者：森本紗磨美）の研究に取り組んでいる。

大学院修了生の学会発表支援を行い、第 16 回日本クリティカルケア看護学会にて修了生 1 名が、第 22 回日本救急看護学会学術集会にて修了生 1 名が発表を行った。また、1 名が高知女子大学看護学会誌 46 巻 1 号に原著論文を投稿し、掲載された。大学院生の修士論文としては「救命治療過程にある患者への ICU 看護師のケアリング」、学部生の看護研究としては「ドレーン廃液の客観的な観察指標の開発」について取り組んだ。

3. 大学院関連

急性期看護学領域では、令和 2 年度にクリティカルケア看護学領域 CNS コース 1 名の大学院修了生を輩出した。

4. 評価および次年度の課題

今年度は COVID - 19 の影響もあり、予定事業の中止や開催方法の変更を余儀なくされたが、おおむね計画通り事業や学習会を開催することができた。ケア検討会や学習会などの事業の運営に際し、リモートを効果的に活用することでさらに領域活動を活発に行うことができるであろう。しかし、研究成果を十分に公表することができていないことが課題としてあげられる。領域としてそれぞれが研究に取り組むための工夫を行っていく。

＜小児看護学領域＞

1. 社会貢献活動

1) 赤ちゃん同窓会

令和2年11月3日（火）に規模を縮小して開催を計画していたが、COVID-19の感染拡大により中止となった。参加者は、易感染性のある子どもであり、今後はオンラインシステムの活用についても、高知医療センターと協議していく予定である。

2) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援

毎年、高知医療センターすこやかAフロアと連携し、新人看護師を対象とした「けいれんの子どもへの対応」をテーマに、シミュレーション勉強会を年間4回計画し、実施してきた。しかし、本年度はCovid19の感染拡大に伴い中止となった。今回の継続教育支援の中止の理由として、①教員が病院内で研修会を行うことが、感染予防対策上困難であったことと、②継続教育の対象者である看護師がCOVID-19への対応で研修会に参加できないという2つの理由がある。病棟管理者とも今後の継続教育支援について検討し、オンラインシステムを活用した継続教育支援について、来年度は検討する予定である。

3) 小児看護の魅力語る会

COVID-19の感染拡大により中止となった。来年度に向け、オンラインシステムを活用した開催などを検討していく。

4) 修了生の会

例年、日本小児看護学会学術集会1日目に開催していたがCovid19の感染拡大により中止となった。修了生のニーズを把握しながら、次年度開催を検討していく。

5) 大学院事例検討会・特別講義

(1) 小児看護学領域事例検討会

修了生や在校生を対象として、例年、年3回程度開催していたが、今年度はCovid19の感染予防および拡大防止対策として、学外者が参加しての対面での会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。

(2) 小児看護学領域特別講義

講師：高増哲也氏（神奈川県立こども医療センター アレルギーセンター副センター長）

日時：令和2年12月20日（日）10時30分～16時30分 オンライン講義

参加者：8名（大学院生、修了生、教員）

内容：今年度は小児アレルギーの専門医である高増哲也氏より、アレルギー疾患、小児の栄養について、講義を受けた。小児看護専門看護師として、専門的なケアを提供するために、病態生理、検査、治療、およびその結果の解釈をする能力を養うための講義であり、大学院生、小児看護専門看護師である修了生、教員が受講した。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響のため、広報規模を縮小しオンラインで実施した。また、小児看護領域では平成30年度より小児看護専門看護師による特別講義を修了生のキャリア支援として位置づけを行っている。本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響のため、キャリア支援講義は開催しなかった。

2. 研究活動

1) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

開催日時：Zoom によるオンラインにて毎月開催

(6/21・7/19・8/23・9/22・10/24・12/19・1/31・2/23・3/27)

開催場所：高知県立大学看護学部または研究メンバー職場・自宅、高知医療センターNICU・GCU

参加人数：17名（医療センター1名さらに増員予定、県大11名）

内 容：「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活動」（研究代表者：高知県立大学看護学部教授 中野綾美）における、家族を対象とした研究を NICU・GCU の看護師とともに共同研究として開始した。しかし、COVID-19 感染拡大に伴い、インタビュー日程が未定となっている。今後、感染状況によって再開していく予定である。また、看護師を対象としたアンケート調査も県外施設の協力を得て実施しており、3施設から328通のデータを得た。今後は施設を増やして実施する予定であり、1施設の協力依頼中、2施設依頼予定、追加2施設の協力を得ている。次年度が研究期間最終年度であり、得られたインタビューデータとともにアンケート調査結果に基づき、「命に向き合う子どもと親のエンド オブ ライフへの看護支援モデルの構築と活用」のためのガイドラインや指針の作成を遂行していく。

3. 活動の評価

今年度は、Covid19 の感染拡大の伴い、NICU 退院後の子どもや家族の支援として高知医療センターと共催で開催している赤ちゃん同窓会や、専門職者や修了生を対象とした事例検討会は開催することができなかったが、オンラインを用いて特別講義の開催、研究活動、アンケート調査は継続することができた。

4. 次年度の課題

地域貢献活動については、COVID-19 の感染拡大状況に合わせて、参加者の安全に考慮し、継続可能な方法を検討していく。COVID-19 の感染拡大状況にもよるが、Web ミーティングツールの活用により遠方の修了生や専門職者が参加しやすくなるという利点があるため、活用を検討していく。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿、ガイドラインの作成などに取り組んでいく。

<母性・助産看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース (BLS0) の運営支援

高知医療センター包括連携事業として BLS0 コースの開催が検討されていたが、今年度は、COVID-19 拡大により中止となった。

2) リカレント教育

今年度は COVID-19 拡大を鑑み、開催を中止とした。

3) 令和 2 年度母性助産看護学領域交流会

今年度は COVID-19 拡大を鑑み、開催を中止とした。

2. 学習会

母性・助産看護学領域の教員が参加し、母性・助産看護学に関する論文の抄読会を行った。今年度は 3 回開催し、意見交換を行った。

[第 1 回] 令和 2 年 11 月 11 日：産婦の主体的取り組みに関する量的研究

[第 2 回] 令和 2 年 12 月 2 日：母性・助産看護学における尺度開発・活用

[第 3 回] 令和 3 年 1 月 7 日：周産期の臨床判断力・フィジカルアセスメント教育のミニマム・エッセンシャルズに関する研究・教育への活用

＜老人看護学領域＞

1. 社会貢献活動

CCOVID-19 感染拡大の影響により、従来実施していた社会貢献活動（病院・施設の方々とのケア検討会）が行えなかった。次年度は、COVID-19 感染の状況を踏まえ、ケア検討会およびカレントの開催方法を検討する。

2. 研究活動

「急性期病院に入院中の認知症高齢者に対する効果的ケア・パッケージの開発」（2019～2022年、基盤研究C、研究代表者、竹崎久美子）に取り組んだ。今年度は、認知症患者の看護についての現任教育、院内デイケアおよび身体抑制をテーマに文献検討を行った。その結果から、ケア・パッケージの構成を検討し、現在ケア・パッケージ（案）を作成中である。次年度は、ケア・パッケージを急性期病院に勤務する看護師に意見を聞き、洗練化する予定である。研究成果として、「日本における身体抑制に関する看護研究の動向：テキストマイニングを用いた論文表題の分析」を、高知県立大学紀要看護学部編（70巻）に発表した。

3. 教育活動

今年度は、COVID-19 感染拡大の影響により、講義科目において、前期はオンデマンド型の遠隔授業、後期は遠隔授業と対面授業のハイブリッド型授業にて展開した。従来対面で実施していた高齢者疑似体験演習（2回生前期科目「老人の健康と看護」）は全て遠隔、ゲストスピーカーによる「老人看護における最新課題」の講義および様々な疾患状態に対する高齢者ケアの特徴のグループワーク（2回生後期科目「老人看護援助論」）は、遠隔と対面とのハイフレックス型で行った。

<精神看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 看護相談室（ケア検討会）

令和2年度は、1回の看護相談室を開催した。本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を実施した。

① 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

開催日時：令和3年3月25日(木) 19:00-21:00

場所：高知県立大学看護学部棟 C326、Web開催

参加人数：13名〈本学大学院生3名、本学大学院修了生5名、元教員1名、教員4名〉

内容：

参加者が所属する施設における、CNSの活動報告をしていただき、その活動を踏まえた看護理論の組織への定着に向けた方策について、参加者で意見交換を行った。その方策としては、組織におけるCNSの役割開発として、看護管理者の理解や協力を得ることなど、組織に根付くための働きかけを積み重ねていくことも、必要になることが話し合われた。他の参加者にとっても、自身の活動について振り返るきっかけとなり、新たな視点で今後の活動や役割開発について考える機会となった。

2) 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

日本精神保健看護学会学術集会の開催に合わせて、交流会を実施してきたが、令和2年度の開催はCOVID-19の感染拡大予防のため、Web開催となったことから、現地で集合することができなかつたため、交流会の開催は中止した。来年度は、COVID-19の感染予防策をとりながら、卒業生・修了生との交流を深める機会を設けたいと考えている。

3) リカレント教育

高知県西部地区の精神科医療従事者への教育機会の提供を目的として毎年実施しているが、令和2年度はCOVID-19の感染拡大予防のため、中止となった。来年度は、Web会議システムを活用し、オンラインでの実施を検討している。

4) 精神科病院におけるボランティア活動

精神科病院の催し物に、学生がボランティアとして参加していたが、令和2年度はCOVID-19の感染拡大予防のため、ボランティア募集がなかつたことから、活動は実施していない。

2. 研究活動

令和元年度高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「高幡保健医療圏における精神障害に対応した包括的支援マネジメントモデルの開発」（研究代表者：瀧めぐみ）の研究活動を実施した。詳細は「戦略的研究推進プロジェクト推進費による活動」に記載している。

研究参加に同意が得られた、中央保健医療圏の精神科を標榜する病院から高幡保健医療圏に退院する精神障害者への包括的支援を行っている看護師・精神保健福祉士3名と、高幡保健医療圏で生活する精神障害者を支援している保健師・訪問看護師・精神保健福祉士・相談支援専門員10名に面接調査を行った。面接調査のデータは、中央保健医療圏の精神科病院から高幡保健医療圏に退院する精神障害者に行っている支援内容と、高幡保健医療圏で生活する精神障害者の地域定着のために行っている支援内容、これらの支援を行う上での課題という視点で分析を行っており、

各市町村や精神科病院ごとの特徴についてカテゴリー化を進めている。

今後はデータ分析より明らかになった高幡保健医療圏における精神障害者への包括的支援マネジメントの現状と課題を基にして、モデル案の作成をしていく予定である。

3. 評価

令和2年度は、COVID-19の感染拡大予防のため、毎年実施してきた活動がほとんど実施できなかった。しかし、学内だけでなく、個人や施設においてWeb会議システムが使用できる環境の整備が整ってきたことで、3月には看護相談室をWeb開催することができた。今回は、話題提供者が所属する施設における活動に関する検討がテーマであったため、Web上で資料を共有できた。しかし、今後も継続的に看護相談室を実施していくためには、Web会議システムを活用して、事例に関する検討において個人情報保護できる開催方法を事前に検討しておくことが必要である。

4. 次年度の課題

COVID-19感染予防における本学の対応に沿って、これまで行ってきた様々な活動は、対面での実施だけでなく、Web会議システムなどを活用した新しい方法での開催を検討し、継続して実施していくために、Web開催で看護相談室のような事例検討を行うための事例の情報を保護する方法や、インターネット通信にかかる費用を参加者が負担することなどが課題として挙げられる。他に看護相談室を開催している領域の実施方法等も情報収集して参考にするなど、開催方法を検討していく。

また、高知県立大学戦略的研究推進プロジェクトが目標に到達していないことも課題として挙げられるため、包括的支援マネジメントモデル案の作成に向けて次年度も継続して進めていく。

<家族看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

今年度は COVID-19 の感染予防および拡大防止対策として、不特定多数の学外者が参加する会合等は原則開催しないという全学的な方針に従い、開催を中止した。

2) リカレント教育

大学院修了生への継続的なサポートの一環として、リカレント教育を行っている。今年度は、毎月第3金曜日に Web ミーティングツールを活用し5回開催した。修了生から提供された事例について、家族アセスメント、家族への看護支援の方略、家族との援助関係の形成、多職種との協働における看護者の役割など、様々な視点からディスカッションを行った。参加者にとって、自身の実践を振り返ったり、課題に気づき解決に向けた取り組みのヒントを得たりする機会となった。Web ミーティングツールを用いた開催は、昨年度から取り入れているが、遠方の修了生も負担なく参加でき有効であった。

【第1回】

日 時：令和2年7月30日（金）18：30～20：30

参加者：修了生3名、教員3名

テーマ：COVID-19による面会制限がある中での看取り期にある患者・家族への家族看護実践

【第2回】

日 時：令和2年10月16日（金）18：30～21：20

参加者：修了生2名、大学院在学学生1名、教員4名

テーマ：家族看護実践の中での困りごとについて

【第3回】

日 時：令和2年11月20日（金）18：30～21：15

参加者：修了生5名、大学院在学学生1名、教員6名

テーマ：家族の拠り所である家族員を失う不安から現実を受け止められず動揺する家族の事例

【第4回】

日 時：令和3年1月15日（金）18：30～20：30

参加者：修了生2名、大学院在学学生1名、教員4名

テーマ：患児と家族の捉えが部分的であったことにより、医療者が家族との関わりに困難を感じていた事例

【第5回】

日 時：令和3年2月19日（金）18:30～20:40

参加者：修了生2名、大学院在学学生1名、教員5名

テーマ：医療者が患者の配偶者との関係形成に困難感を感じた終末期のがん患者と家族の事例

2. 研究活動

1) 教員の研究活動

家族看護領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて研究活動に取り組んでいる。「慢性心不全患者・家族のアドバンス・ケア・プランニング支援ガイドラインの開発」（研究代表者：長戸和子、2020～2022年度）、「患者・家族と看護者間のコンフリクトの発生・悪化を予防する教育プログラムの開発」（研究代表者：瓜生浩子、2020～2022年度）、「糖尿病足病変予防のための看護師のアセスメント力を高める教育プログラムの開発」（研究代表者：坂元綾、2018～2020年度）、「ICUにおける人工呼吸器装着患者

の集中治療後症候群予防のケアガイドライン開発」(研究代表者:神家ひとみ、2020～2023年度)、「人工呼吸器を装着した児と家族のヘルスケア機能を増進するためのケアガイドライン開発」(研究代表者:中井美喜子、2019～2021年度)に取り組んでいる。

研究成果として、高知女子大学看護学会誌に原著論文2編、高知リハビリテーション専門職大学紀要に1編の論文投稿を行った。学会発表は、日本家族看護学会第27回学術集会1題、第25回日本在宅ケア学会学術集会3題、第40回日本看護科学学会学術集会1題の発表を行った。また、日本家族看護学会第27回学術集会において修了生2名が発表を行った。

2) 修了生を対象としたアンケート調査の実施

今後の家族看護学領域の活動の活性化に役立てることを目的として、修了生全員を対象に Web によるアンケート調査を実施し、8名からの回答を得た(教育機関に所属している方1名、病院等で看護師として勤務している方7名)。調査内容は、現在の所属部署、職位、役割、家族看護に関して実践していること(実践、教育、研究など)、課題や困っていること、今後高めていきたい能力や学びたいこと、そのために大学からどのようなサポートがあればよいか、リカレント教育で学びたいことなどである。

アンケート結果では、課題や困っていることとして、実務と複数の教育活動に追われ、研究活動ができていないなど、多忙な中で様々な活動に思うように取り組めないことが挙げられていた。今後高めていきたい能力や学びたいこととして、CNS としての直接介入とコンサルテーションの見極めと移行の仕方、スタッフの機能を最大限に活かし部署の家族看護実践を高める方法、研究への支援や自身の研究活動などが挙げられていた。大学に求めるサポートやリカレント教育で学びたいこととして、アサーションやコミュニケーション技術、コンサルテーション能力、研究活動などであり、「大学院で学んでいた時の様に、最新の知見に関する講義に参加できる機会が欲しい」などの意見があった。

3. 活動の評価

今年度は、COVID-19の影響により地域の専門職者を対象とした事例検討会を開催することはできなかったが、修了生対象のリカレント教育を定期的で開催した。リカレント教育においては、家族支援専門看護師の資格を有している修了生の参加もあり、相互研鑽や情報交換の機会としても位置づけることができたと考える。また、在学生にとっては、修了生の家族看護実践の実際やその中での課題を知り、ロール・モデルを知る機会となった。例年、日本家族看護学会学術集会の開催に合わせて実施している修了生・在学生・教員の交流会は、学術集会も Web 開催となったため開催できなかったが、リカレント教育で Web ミーティングツールを活用したことにより、遠方からの参加も可能となり、相互交流の機会としても有効であった。

研究活動に関しては、毎週月曜日に研究ミーティングを開催し、現在取り組んでいる研究に関して相互に意見交換を行いながら研究を進めている。それぞれが取り組みの目標を立てて計画的に取り組むことはできたが、成果の公表については十分とは言えない。

4. 次年度の課題

リカレント教育は次年度も継続する。COVID-19の感染拡大状況にもよるが、Web ミーティングツールの活用により遠方の修了生が参加しやすくなるので、引き続き活用しながら実施することを考えている。また、修了生対象のアンケート調査の結果に基づき、各回のテーマと内容を決めて年間の活動計画を年度当初に提示し、より多くの修了生が参加できるようにする。

研究活動に関しては、修了生の論文投稿の支援および教員の論文投稿の促進、教員の研究への修了生の参画などに取り組んでいく。

<在宅看護学領域>

1.社会貢献活動

1)第 25 回日本在宅ケア学会学術集会

令和 2 年 6 月 27 日 (土)「ライフ・デザインと多職種協働～主体的選択を地域で支える仕組みづくりに向けて～」をテーマとして、森下安子学術集会長はじめ、領域の教員が事務局を務め、修了生も企画委員に加わってもらい、Web にて開催した。参加者は 546 名であり、盛況のうちに終了した。なお、詳細の事業報告は、第 1 部「1.第 25 回日本在宅ケア学会学術集会」にて報告している。

2)ケア検討会

在宅看護ケアの質向上、在宅看護のネットワーク作りを目指し、看護学部看護相談室事業として、在宅看護学領域ケア検討会を年 4 回、定期開催する予定であった。しかし、訪問看護ステーションからの聞き取りにて、CCOVID-19 の影響で訪問看護ステーション利用者が増加し、業務が多忙な状況があることが明らかになったため、ケア検討会の開催を見合わせた。また、訪問看護ステーションでは、COVID-19 の影響で病院の面会制限の継続に伴い、自宅で過ごすことを希望される療養者やご家族が増えていること、特にターミナルケアを必要とする方が増加しており、看取りに向けてのケアニーズが高まっていること、医療的ケアが必要な方が増えたため、技術や知識においてより専門性が求められている状況を把握した。

3)健康長寿センター事業の展開

以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第 1 部「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」にて報告している。

(1) 地域医療介護総合確保基金事業

- ①入退院支援体制推進事業、
- ②高知県介護職員喀痰吸引等研修、
- ③中山間地域等訪問看護師育成講座、

(2) 地域連携事業

- ①土佐市連携事業：地域ケア会議推進プロジェクト、
- ②地域ケア会議コンサルテーション事業

4)中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、公立病院連絡会、中央西在宅医療連携委員会等にアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

2.研究活動

1)研究発表

高知女子大学看護学会誌に原著論文 2 編が掲載された。また、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会で、12 件の研究を発表した。

2)活動中の研究

科学研究費助成事業（以下、科研）では、今年度 5 件の研究が新規採択された。継続して取り組んでいる研究と合わせ、研究代表者として 8 件の研究を行っている。また、高銀地域経済振興財団からの研究助成に 1 件採択され、その結果を発展すべく学内の戦略的研究推進プロジェクトにも申請し、採択された。

(1) 科研

課題名	期間	代表者
慢性心不全高齢者の再入院を予防するシームレスケアを創る 退院支援ガイドラインの開発	2018.4.1- 2021.3.31	森下安子
独居高齢者のエンド・オブ・ライフ期の在宅療養を支える 多職種協働プログラム開発	2017.4.1- 2020.9.30	川上理子
新卒訪問看護師と学習支援者の期待不一致を解決する学習支援 プログラムの構築	2017.4.1- 2021.3.31	森下幸子
慢性疾患患者を支える外来看護師のアセスメント能力を育成 する教育プログラムの開発	2019.8.30- 2021.3.31	竹中英利子
組織学習を支える訪問看護管理者のコンサルテーション力を 高める教育支援モデル構築	2020.4.1- 2023.3.31	森下幸子
学童期にある発達障害児の家族の家族ストレスを促進する ケアプログラムの開発	2020.4.1- 2024.3.31	源田美香

(2) 高銀地域経済振興財団

課題名	期間	代表者
高齢者の在宅看取りに対する自己効力感と先行要因の明確 化	2020.4.1- 2021.3.31	川上理子

(3) 戦略的研究プロジェクト

課題名	期間	代表者
高齢者の在宅看取りを促進する地域文化の創生を目指す教 育プログラムの開発	2020.4.1- 2022.3.31	川上理子

また、地域看護学領域、家族看護学領域、看護管理学領域、小児看護学領域、災害看護学領域の科研の研究分担者として7件に参画している。

3.評価

社会貢献活動では、第25回日本在宅ケア学会学術集会を通じて、領域で積み上げてきた多職種協働の知見を全国に発信し、高知県内の他職種協働の取り組みを全国に発展する機会を持つことができた。また、Web上でのLive配信、会期の短縮という開催方法の変更に伴い、企画委員、実行委員、講師と共に、視聴者側をより意識したプログラム編成と配信の工夫を行うことで、新たな学術集会を開催することができた。また、ケア検討会については、訪問看護ステーション等から、COVID-19の影響による医療環境の変化で自宅退院を希望される療養者のご家族が増え、在宅ケアのニーズは一層高まっている状況が把握できた。このような現状から、COVID-19の感染状況の動向と、参加者の業務状況を踏まえつつ看護職のニーズに対応できるよう、ケアマネジメントや看護実践を検討する機会を設ける。健康長寿センターの事業展開では、コロナ禍においても、感染対策を徹底し、予定どおり実施することができた。しかし、研究活動においては、コロナ禍においてなかなか進んでいない現状がある。また今年度は修了生を対象とした研修会開催や修論の投稿への支援が実施できなかった。

4.次年度の課題

- ・ターミナルケアを必要とする療養者やその家族へのケアや、医療依存度の高い療養者が住み慣れた場所で暮らすことを支えるケアについてケア検討会を実施する。
- ・科研等、研究活動を計画的に行っていく。
- ・修了生の支援ニーズを把握し、支援を充実していく。

<地域看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) 高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムによる活動として、高知県健康長寿政策課と協働で取り組んでいる。以下、領域で取り組んだ人材育成支援について、報告する。新任期保健師育成支援に関する詳細は、「10. 健康長寿センターにおける看護学部の活動」の「5) 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動 (1) 高知県新任保健師研修会」を参照されたい。

(1) 新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、プリセプター能力育成研修として、年に2回実施した。令和2年度は、COVID-19の影響により、第1回はWeb開催となった。この研修では、高知県新任期保健師支援プログラム Ver.3の説明と共に、目標管理、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義と、「管理期・プリセプターの役割」に関する資料提供を行った。第2回プリセプター能力育成研修は、プリセプター、管理者、研修担当者が、2020年度の人材育成について各市町村の評価を共有し、評価視点に沿って総合的に評価し、今後の取り組みについて検討した。

第1回プリセプター能力育成研修 Web開催	令和3年5月26日(火) 13:30~15:30 参加者:58名 講義 『新任期保健師支援プログラム』行動目標とは何か 小澤若菜 資料配布「管理者・プリセプターの役割」
第2回プリセプター能力育成研修	令和3年3月22日(月) 14:00~16:30 参加者:22名 講義「管理者・プリセプターの役割」 時長美希 保健師育成の評価等についてのグループワーク・意見交換のサポート および助言:時長美希・小澤若菜・川本美香・高橋真紀子

(2) 中堅期保健師育成支援

高知県の行政機関に所属する中堅期保健師育成支援として、保健活動評価研修への参画を計画していたが、COVID-19の影響で令和2年度は、中止となり開催されなかった。

(3) 福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認を行った。また、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言を行った。

中央東福祉保健所	11月25日(水) 13:30~16:30 参加者:7名 3・4年目保健師 内容:課題に関するグループワーク・意見交換:川本美香
中央西福祉保健所	11月11日(水) 10:00~12:00 参加者:12名 1・2年目保健師とプリセプター 講義「普段の気づきを活かした展開—新任期保健師研修の課題を活用して—」 課題に関する意見交換:川本美香
須崎福祉保健所	新任期保健師及びプリセプター支援研修会 参加者:17名 9月17日(木) 13:20~16:30 講義「PDCAサイクルと業務の展開»:高橋真紀子 グループワーク:小澤若菜・高橋真紀子
幡多福祉保健所	管内新任保健師研修会 11月30日(月) 13時~16時30分 参加者:11名

	講義「保健師の記録の書き方」 集合研修の課題に関する発表・グループワークの助言：小澤若菜
--	---

2) 地域保健活動支援

高知県健康長寿政策部健康長寿政策課、高知県健康政策部健康対策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動への参画、助言を行った。福祉保健所の地域保健活動報告会では、市町村の様々な事業や保健活動に関する報告を通して、参加者同士、活発な意見交換や質疑応答がなされた。報告会での助言を通して、参加者が、保健活動の評価の視点や方法を学び、より効果的な実践を目指す機会となった。市町村に対しては、高知市において、COVID-19に係る応援派遣として、1名を現地派遣し、現地での保健師業務の支援にあたった。高知県国民健康保険団体連合会の保険者への保健事業支援・評価等を行っている。国保連合会の事務局と事前協議、実施後の振り返りを行いながら、効果的な保健事業の推進を図るための支援を行った。

(1) 高知県

- ・幡多福祉保健所管内保健福祉活動報告会

令和3年3月1日(月) 13:30～16:00 報告10題、参加者40名

講評・助言者：小澤若菜

(2) 市町村

- ・高知県立大学と高知市の連携に関する協定書に基づく新型コロナウイルス感染症に係る専門職の応援派遣

【派遣先】 高知市 【期 間】 令和3年1月13日～2月5日

【業務内容】 保健師業務の支援 【派遣教員】 高橋真紀子

(3) 高知県保健師人材育成評価検討会

第1回は、令和2年度の保健師人材育成関係事業計画について、行政保健師確保対策について、高知県保健師80周年記念行事について、情報共有および意見交換を行った。第2回は、令和3年度事業計画、保健師確保対策の1つとしての県内3教育機関の地域看護に関する実習の実績および実習計画、保健師の研究活動支援について、高知県保健師80周年記念誌の作成について、令和3年度高知県保健師人材育成評価検討会の開催予定について、意見交換を行い、検討した。

第1回 7月28日(火) 第2回 令和3年3月9日(火)

(4) 高知県国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員会

高知県国民健康保険団体連合会の委員として国保・後期高齢者ヘルスサポート事業への支援を行っている。今年は、前年に策定したデータヘルス計画の中間評価に関する助言等をおこなった。また、新たに高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に向けての打ち合わせと保険者への支援を行うと共に、関係者との連携や体制整備に関する課題の共有をおこなった。今年度は、委員会の開催方法として、事務局による個別訪問と書面開催となった。最終の面談・情報交換会のみ人数制限をおこない、対面で開催された。

【開催状況】 2020年7月16日(木)、9月4日(金)、10月30日(金)、11月16日(月)

2021年1月29日(金)、3月11日(木)、3月18日(木)

【対象保険者】 27保険者

3) 学生のボランティア支援

高知市一宮トーメン団地自治会「第6回桜まつり(桜ウォークラリー)」への参加を計画していたが、COVID-19感染拡大防止を考慮し、学生参加を中止した。

4) 高知県看護協会保健師職能委員の活動

高知県内の保健師職能委員と共に、保健師のネットワークの強化や、人材育成に関する課題解決、地域包括ケアの構築に向けた役割の明確化を図るため、さまざまな組織の委員と共に、教育機関として活動し、事業運営や研修の企画を行っている。今年度は、3 職能生きる力を育むいのちの教育特別検討委員会の発足に伴い、次世代育成事業における活動方針の協議や研修会の企画・運営等をおこなった。

5) 高知県市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会が行う研修会への協力

市町村衛生協議会保健師部会高知ブロック・須崎ブロック研修会の企画・実施・評価に協力した。また、令和2年度高知県看護協会保健師職能委員会アフターミーティング研修会では、研修の企画・実施・評価に関する研究活動報告を行った。これらの活動では、看護管理領域および基礎看護領域と協力し、研修に使用する冊子の作成や、研修評価に取り組んだ。

高知県市町村衛生職員協議会保健師部会 ブロック研修会	高知ブロック：参加者数 62 名（第 1 回目 36 名、第 2 回目 26 名） 第 1 回 10 月 1 日（木）13：30～16：00 「事例検討とファシリテーターの役割」 第 2 回 11 月 13 日（金）13:30～16：00 「対象の捉え方」 須崎ブロック：参加者数 64 名（第 1 回目 34 名、第 2 回目 28 名） 第 1 回 10 月 2 日（金）13：30～16：00 「事例検討とファシリテーターの役割」 第 2 回 11 月 12 日（木）13:30～16：00 「対象の捉え方・効果的な保健指導」
高知県看護協会保健師職能委員会アフターミーティング研修会	令和 3 年 2 月 6 日（土）13：00～16：00 参加者 17 名 研究活動報告①「アンケート調査結果」坂元 綾 研究活動報告②「研修冊子について」川本美香

6) 全国保健師教育機関協議会の活動

令和 2 年度は、全国保健師教育機関協議会中国・四国ブロック委員として、2020 年度中国・四国ブロック研究会・オンライン研修の準備に携わった。新型コロナウイルス感染症の影響で運営が模索されるなか、中国四国ブロック理事の他校の先生方と連絡をとりながら、主にメール会議での活動を行った。

ブロック委員：時長 美希

2. 研究活動

1) 高知県市町村衛生職員協議会保健師部会・高知県看護協会と協働した研究的取り組み

テーマ：「経験学習モデルを活用した保健師の経験を成長につなぐ研修プログラム」の評価に関する研究

経験学習モデルを活用した保健師の経験を成長につなぐ研修プログラムの運用からその有効性を評価し、研修プログラムを成立させることを目的として、地域看護学領域の教員が研修代表者となり、看護管理領域・基礎看護学領域の教員、高知県市町村衛生職員協議会保健支部会の保健師、高知県看護協会の保健師が協働して、研修に使用する冊子の作成、研修の評価を行った。

2) 科学研究費、大学の戦略的研究、その他の研究的取り組み

第2部で教員の活動、研究に関する報告に記載。

3. 活動の評価

地域貢献活動の 1) 高知県保健師人材育成、については、高知県保健師人材育成ガイドラインに基づいて、PDCAサイクルを運用している。アウトカム評価として、新任期の人材については、各自治体において、個人の目標達成を評価し、高知県が集約している。プロセス評価として、「新任期保健師育成に係わるOJT担当者会」において、評価検討会を行っている。それらの評価結果を次年度の人材育成活動に反映させている。また、「高知県保健師人材育成評価検討会」において、高知県内の公衆衛生看護に携わる人材（学生の教育、公衆衛生看護実践者の継続教育など）の育成を担っている関係者が、2回/年の会議を開催して、年間計画の検討と評価を行っている。地域看護学領域の教員はこれらの委員会の主要なメンバーとしてアウトカム評価、プロセス評価を行っている。

地域貢献活動の 2) 地域保健活動支援、については、それぞれの活動ごとにアウトカム評価を中心にして、評価を行っている。

研究活動、については、領域として取り組んだ研究活動の成果を社会に公表できていないものがあること、教員各自が取り組む様々なその他の研究については、領域独自で取り組みの状況や成果公表について評価をしておらず、看護学部の研究促進委員会にゆだねている。

4. 今後の課題

地域貢献活動については、今後も地域の関係者とPDCAサイクルの運用全体について協働的に取り組んでいく。協働的に取り組む中で、大学の貢献について継続的に検討をしていく。

研究活動については、各教員が取り組む研究活動について領域活動として、研究のための時間を確保していくこと、成果の公表を支援していくことを強化していく。

<看護管理学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会（看護相談室）

令和2年度は、COVID-19対策のため、例年3回実施していたケア検討会の年間計画を2回に縮小し、遠隔会議システムを使用した運用を準備した。しかし、開催予定当日の台風接近やその後の感染再拡大に伴い、中止を余儀なくされた。次年度は、臨床現場の看護管理者を支援する仕組みにつながるテーマを選定し、無理のない運営を目指していきたい。

2) 高知医療センターとの包括的連携事業

令和2年度は、看護管理学領域からは、継続教育支援としてマネジメントリフレクション(1回)、QCサークル活動コンサルテーション(オンライン会議システムとメール)を実施した。

3) 健康長寿センター事業への参加

入退院支援事業の研修事業「管理者研修」「看護管理者研修」「入退院支援コーディネーター能力修得研修」「入退院支援コーディネーターフォローアップ研修」の講師を務めた。

4) 抄読会

看護管理学領域専攻の博士前期、後期課程の学生と看護管理学領域の教員が中心となって、を週に1回実施している。本年度は、例年より開始時期は遅れたが、5月から遠隔会議システムを活用して、実施した。夏季、冬季休業期間を除いて、2月末まで毎週継続した。プレゼンターは領域の博士前期課程の院生に加えて、領域外(DNGL)の院生や教員も分担し、研究のレビューとクリティック、実践への活用について活発に討議した。本年の対象論文は、28本であった。

2. 研究活動

看護管理学領域では、それぞれの教員が学内の戦略的研究プロジェクト推進費や科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。

看護管理領域において共同して取り組む研究には「看護管理実習における学生の学びに基づく実習プログラムの評価」があり、研究成果は、日本看護教育学会第30回学術集会において「看護管理実習における学生の実習の評価と学習」(内川洋子、山田覚、久保田聡美)を発表している。

また、大学院修了生の学会発表支援を行い、第24回日本看護管理学会、第15回医療の質・安全学会学術集会、第40回日本看護科学学会学術集会、第58回日本医療・病院管理学会学術集会にて修了生2名が発表を行った。大学院生の修士論文としては「看護師長の成長につながる経験と同僚師長からの支援」、「スタッフの看護実践能力発揮感とその影響要因に関する研究」、「看護計画を立案している看護師の思考に影響を及ぼす電子カルテの画面デザインセルフケア」について取り組んだ。

3. 評価

看護管理学領域における社会貢献活動の中でも、年に3回のケア検討会を企画運営することを目標にしてきたが、今年度は、COVID-19感染拡大に加え、開催日当日の大型台風接近により、中止を余儀なくされた。前年度より、幡多地域等の遠隔からの参加も可能とするために遠隔会議システムを活用したケア検討会開催の準備は進めてきたが、今年度の状況から臨床現場の個々の看護師のネットワーク環境には個人差があり、所属病院の会議室等に集合したサテライト的な場所が必要であることが明らかになった。

また、当日中止になったものの、準備段階での申し込み状況から評価すると、昨年度まで参加者の多かった施設(高知医療センター、国立高知病院、幡多けんみん病院)に加えて、本学の健康長寿センター等の事業に参加している病院(あき総合病院、細木病院)からの申し込みも増加している。リカレント教育・交流会については、本年度は実施を見送った。

本年度の看護管理学領域の抄読会は、遠隔会議システムを活用したため、昨年度までの課題であった実践リーダーコースの学生も職場から参加できる環境が整い、博士前期課程は研究コースと実践リーダーコースの計3名がほぼ毎回全員出席した。また、9月以降は、次年度に入学予定の博士後期課程の学生の参加者も加わり、クリティークの際の議論の深まりが実感できた。

その他、令和2年度には、看護管理学領域修了生1名が認定看護管理者資格を取得した。

4. 次年度の課題

社会貢献活動に関しては、臨床現場のニーズを把握しながら、教育研究活動とバランスをとっていくことが課題といえる。特に、ケア検討会については、高知県下の看護管理の学際的ネットワークの構築・維持と同時にケア検討会での議論の深まりを期待して、昨年度までは20名程度の参加を目指してきた。しかし、今後は、遠隔会議システムを活用した会議が中心となることが予測されるが、参加人数だけでなく、テーマ選定とのバランスをとる必要がある。また、テーマに沿った話題提供や議論を深める論文提供を院生の学びの場と繋げる仕組みためにも事前の準備が鍵といえる。全学的な取り組み(医療センターとの包括連携事業や健康長寿センターの事業等)とのつながりを視野に入れたテーマ選定と事前準備に注力したい。

抄読会に関しては、次年度は、博士前期課程の学生が少ないため(M1 実践リーダーコース2名)、他の科目や学生の業務とのバランスを視野に入れた運営が求められる。今後も看護管理学領域の院生にとって、学びの基盤となる仕組み創りを目指していく。

＜共創看護学領域＞

1. 本年度の活動総括

本年度は共創看護学領域開設の年であり、1名の学生を迎え、新カリキュラムの運営と共に、学生の学修環境の整備を中心に行っていた。同時に、それぞれの教員が、競争的研究資金を獲得し以下の研究活動に取り組んでいる。

共創看護学領域は、CNSの養成を行うことを目的としない研究コースであるため、ケア検討会のような卒後（修了後）教育的な活動は行っていない。今後修了生が増え、博士後期課程に進学する者が出るようになれば、バラエティに富んだ研究方法を駆使できる領域集団が形成され、看護学の殻を打ち破るような研究を行い、広く社会貢献ができるようになる。

1) 研究活動

(1) テーマ：障害文化と健常文化を超えて共創する支援のパターンランゲージ

科研基盤研究(C) 2021年－2024年

研究代表者：畦地博子

本研究の目的は、障害者の多様性を認め、障害文化と健常文化を越えて共創する支援のあり方を探究することであり、多様性・文化の差異に配慮した優れた障害者支援（good practice）の実践知に内在しているパターンを明らかにし、説明力あるランゲージを提案することである。小児看護、精神看護、養護、老年看護などさまざまな看護領域の研究者と、文化人類学を専門とする研究者が学際的に協働して実施している。本年度は、中心のコンセプトとなる「共創」と「障害文化」についての概念分析を行った。

(2) テーマ：がん化学療法による手足症候群および爪囲爪炎の早期検出と新規外用剤による予防的介入

科研基盤研究(C) 2018年－2021年

研究代表者：池田光徳

がん化学療法薬であるマルチキナーゼ抑制薬の投与により高頻度に発症する手足症候群／爪囲爪炎病変の発症機序を、皮膚生理学的検査方法を用いて明らかにし、本症の最早期病変が何であるかを検討した。手足症候群／爪囲爪炎の発症を抑制するためには、どの時期にどのような看護介入を行うのが適切かを検討した。手足症候群／爪囲爪炎をモデルとして、看護師が皮膚をアセスメントする際に簡便かつ有用な手段を見出すことにより、EBNに基づいた看護技術を展開できるのではないかと考えた。

2. 本年度の評価と次年度の課題

修士課程第1期生1名の第1学年を終了することができた。次年度には本課程に3名の入学生が決定している。次年度に実施予定の第1学年と第2学年の並行した教育は我々にとって初めてであり、教育、研究（学生および教員）および社会貢献を遅滞なく推進することに課題がある。

<災害・国際看護学領域>

1. 社会貢献活動

1) ケア検討会

令和 2 年度のケア検討会は、災害・国際看護学領域としては初めての開催となった。初年度ということで、地域のニーズも探りながら 2 回のケア検討会を企画・実施した。検討会では、地域の看護職ばかりではなく、行政職、院生も含め多くの参加者があり、情報を共有し、類似した状況、問題に対する異なる見方、解決のためのアイデア等について、活発な意見交換を行った。参加者は、情報提供に基づいた現象の多面的な理解、そして個々の状況に応じた解決への手掛かりを見出すことができた。

(1) 第 1 回ケア検討会

【日時】令和 2 年 9 月 18 日（金）18：30～20：00

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】外部参加者 19 名、大学院生 3 名、
教員 3 名、計 25 名参加

<ケア検討会内容>

先ず初めに、以下の演者から情報提供があった。

- ・趣旨説明：「災害時行動要支援者対策と地区防計画の現状」高知県立大学 神原 咲子 教授
- ・話題提供：「出水期の災害時要支援者避難訓練を通して見えきたこと」
(一社) EpiNurse EpiNurse 山中弓子 氏

演者からは、災害時要支援者と地区防災計画に関し、「ここに避難」ではなく「ここで生活」という生活の視点が重要であることが示された。また、COVID-19 流行下での自然災害対策を前提として、一般的な避難所のマニュアルはほぼできているが、場所によりニーズが異なり、一律ではないので多様な対応が必要であること、全国の自治体の避難所ガイドラインに掲載されている項目の調査で、女性関係の掲載割合が低いことなどを例示し、特に個別ニーズが重要で、マイノリティーのニーズを考慮すべきことが示された。最後に、どこに避難すればよいかなどが検討できるので、マイタイムラインを事前に作成しておくとの重要性が示された。

意見交換では、自治体を超えた地区防災計画を実際に立てている地域の情報を求める声があり、マンション、福祉コミュニティ、ショッピングモールなどの例が示された。内閣府の地区防災計画のページや地区防災計画学会のセミナーなどで紹介されたいなどの情報提供もあった。また、ケアマネジャーが個別避難計画を立てることになっているが、ケアマネは避難所のことをどの程度理解しているのかとの疑問が提示され、避難所は場所によって環境が異なり、トイレの状況や使って良いスペースなどが異なること、体育館の段差の有無など、ケアマネと防災に明るい地域住民や民生員などが共に取り組むなどの対策が議論された。

議論を通し、行政に頼るのではなく、様々な避難所の状況の中で、共助のためのデータを整理し、それらも含めた避難所開設キットの必要性が示された。

(2) 第 2 回ケア検討会

【日時】令和 2 年 12 月 18 日（金） 18 時～19 時 30 分

【場所】Zoom による web 会議

【参加者】県下の訪問看護ステーションの看護職を中心に、教員も含め 24 名

<ケア検討会内容>

新型コロナウイルス感染症は全国に拡大し、高知県内でも感染者が急速に増加しており、医療・福祉・保健それぞれが対応を進めているが、経験のない事態に多くの従事者が不安を抱え



ている状況にある。そこで、現在の状況を「災害」ととらえ、感染看護を中心に、人員と物資の管理体制について課題を共有し対策を検討する検討会を企画した。

先ず、木下准教授から、把握している情報として、消耗備蓄品をどの程度備蓄したらよいかという目安、また、不足時にどこにどのようにして依頼したらよいか、予防策としてどこまでPPEの着用をすればよいか、濃厚接触者へはどのような対応をすればよいか、等の情報が臨床から寄せられていることの説明があった。更に、本学の取り組みに加え、現在行っている県下の訪問看護ステーションを対象とした調査の結果の一部として、新型コロナウイルスの感染拡大の状況に不安である、将来の人員の不足が予想される、現状でも個人防護具が不足しているが将来更にそうなると思われる、などが報告された。また、世界や日本の感染状況に加え、医療従者の感染リスクと感染状況についてデータを基に説明があった。

その後、参加している各ステーションから、他のステーションからの協力を得ている、グループ内での協力体制を検討しているなどの状況報告があった。また、各ステーションと訪問看護の協議会との連携や、そのための日頃からのネットワーク構築の必要性等の意見交換がされた。特に、重度のケアを必要とする患者の、主たる介護者が濃厚接触者となった場合のレスパイト入所先の確保が喫緊の課題であることが確認・共有された。

2) 領域活動

(1) リカレント教育、交流会

令和2年度現在、修了生は3名であり、修了生を集めてのリカレント教育等は行わなかった。修了生が未だ少ないこと、在学生に関しては以下の定期的なミーティングがあることにより、具体的な交流会の開催は企画しなかった。本領域の場合、DNGLの学生は本学の学生ばかりではなく、他の4大学の学生もおり、学生同士の交流は日常的にあるが、教員を含めた交流はあまり活発ではない。例年、日本災害看護学会や世界災害看護学会、あるいはEAFONSなどではDNGLの学生が学術的な交流会を企画したり、情報交換や意見交換をする場を設けることがあり、教員も参加していたが、今年度はCOVID-19の拡大により、それらの企画はなかった。

(2) 定例月曜ミーティング

毎週月曜日の12時～12時50分に、定例ランチョンミーティングを開催している。令和元年度は対面で行っていたが、今年度はCOVID-19の関係でZoomによる遠隔ミーティングとなった。内容は、隔週で学生の研究の進捗状況の報告と相談、隔週で学生が博士論文、研究計画書、インターンシップや災害看護活動の報告などのプレゼンテーション、教員の研究報告や教育的なレクチャーなどを行った。報告されたテーマは「2018年西日本豪雨の教訓から見るwith/after コロナの2020年九州豪雨の考察」「高知での県・市町村・看護協会による災害看護協力協定～災害支援ナース等の活用について～」「日本原子力研究開発機構でのインターンシップからの学び」「放射線災害被災地域で生きる—高齢者にとっての復興—」「被災地で収集されるデータとその活用に関する課題」「数値シミュレーション」「福島スタディツアー～東日本大震災から10年、今の福島を見つめる」「高知における防災を通じた産官学連携の取り組み」などであった。

2. 研究活動

災害・国際看護学領域では、それぞれの教員が研究代表者として、また、相互に共同研究者として科学研究費助成金を受けて「災害に関連する専門職者・行政と住民とのリスクコミュニケーションガイドラインの提案」(研究代表者: 山田覚、2020～2023年度)、「全被災者の健康状態把握を支援するモバイル・ツール開発研究」(研究代表者: 木下真理、2020～2023年度)、「地域の全体

最適を目指した減災ケアの可視化とツールの開発」(研究代表者: 神原咲子、2018～2022 年度)、「住民参加型モニタリングによる生活環境評価法の開発」(研究代表者: 神原咲子、2018～2021 年度)、高知県立大学戦略的研究の助成を受けて「大学-臨床連携システムによる感染症に対する地域包括的な対応能力の向上」(研究代表者: 木下真理、2020 年度)、「災害時意思決定支援モバイル・ツール開発のための基礎調査-被災地における看護有資格者の医療知識/技術情報ニーズについて-」(研究代表者: 木下真理、2019～2020 年度)に取り組んでいる。

研究成果として、Malaria Journal 1 編、European Journal of Molecular & Clinical Medicine 1 編、International Journal of Environmental Research and Public Health 1 編、Disaster Medicine and Public Health Preparedness 1 編、Sustainability 1 編、高知女子大学看護学会誌 1 編、高知県立大学紀要 看護学部編 1 編、日本公衆衛生雑誌 1 編、法律のひろば 1 編、自治実務セミナー1 編、河川 1 編の論文投稿を行った。

学会発表は、6th International Research Conference of World Society of Disaster Nursing 1 題、5TH IFIP CONFERENCE ON INFORMATION TECHNOLOGY IN DISASTER RISK REDUCTION ITDRR 2020 1 題、iSAI-NLP-AIoT2020 1 題、日本災害看護学会 4 題、第 24 回日本看護管理学会学術集会 2 題、第 30 回日本看護教育学会学術集会 1 題、第 58 回日本医療・病院管理学会学術集会 1 題、第 15 回医療の質・安全学会学術集会 1 題、第 40 回日本看護科学学会学術集会 2 題、第 11 回日本プライマリケア連合学会学術大会 1 題、第 25 回日本在宅ケア学会学術集会 1 題の発表を行った。

3. 活動の評価

災害・国際看護学領域では、今年度初めてケア検討会を企画・運営した。COVID-19 の拡大の中、DNGL の教員や院生は遠隔授業に慣れていることから、迷わず Zoom によるウェブケア検討会をすることとなった。参加者も合計 49 名であり、想定よりも多くの参加者を得ることができた。一方、これまで本領域の学生や教員は、国内外の地域で活動することが比較的多かったが、COVID-19 により今年度は殆ど活動ができなかった。特に、学生の教育として、地域の小中学校や高等学校での減災教育ができなかった。

DNGL の学生募集は令和 2 年度入試をもって停止し、災害・国際看護学の学修を希望する学生に対しては、令和 3 年度入試からは看護学研究科看護学専攻の前期および後期課程を設置し対応した。令和 3 年度入試では、両課程に合格者がおり、共同災害看護学専攻から看護学専攻への移行ができた。今後は、両専攻の教育・研究を推進するとともに、新領域としての実績を重ねて行く必要がある。

4. 次年度の課題

次年度から大学院の看護学専攻に災害・国際看護学領域が正式に設置され、前期課程 4 名(海外 1 名)、後期課程 1 名の大学院生を迎える予定である。共同災害看護学専攻の学生は 6 名(海外 2 名)在籍しており、計 11 名となり大学院生のマンパワーは確保されるが、前述の地域での活動の活発化は更なる課題となる。また、継続的に大学院生を受け入れ、これまで共同災害看護学専攻の活動で築いて来た県内外、あるいは国外のネットワークを維持していることは、大きな課題である。